

新刊
紹介

同志社大学人
文科学研究所 編

『松本平におけるキリスト教』

— 井口喜源治と研成義塾 —

(同朋舎
四〇九頁、四八〇〇円B5版)

明治期、信州安曇野に土着したキリスト教の拠点ともいうべき「井口喜源治と研成義塾」の研究が『松本平におけるキリスト教』として、同朋舎より公刊された。本書は、同志社大学人文科学研究所が、キリスト教に関する「地域研究」の一環として、一〇年余りの年月をかけ取りくんできた共同研究の成果である。日本のプロテスタン

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be thought expert in both.

ト史をかえりみると、三大バンドの地とは程遠い信州の自然、人情ともに厳しい山間に、土着したキリスト教の一拠点が、地域文化への影響力と共に明らかにされたことは極めて大きな意味をもつ。

万古の残雪を頂く北アルプス連峯の山岳風景を背にした安曇野は、旅人にとって絶勝の地である。天空以外になんの限界もない雪嶺は美的印象と共に超越的なものを志向させる。また、神秘さを感じさせ、精神的視線をして高揚せしめる。この点を、キリスト教への接近における「信州の使命」として強調したのは、手塚縫蔵であった。

しかし、安曇野において、そこに住む人の営みは、雪山系の戴冠として仰ぐ雪嶺の崇高美に高揚される以上に、草の香りの漂う低地の「土」に執着して支えられている。

桑の葉一枚すら財産であったこの地の人たちは、厳しい自然のなかで「土」が産みだす「富」により鋭敏であった。その意味では、安曇野の人情は、相馬をして語らしめるように宗教には、むしろ冷淡であった。

そのような土地に、キリスト教がどのようにに伝播されたのだろうか。本書は、その

問いに極めて厳密な諸資料の検討を通して実証的な解明を試みている。第一部で「松本平の文化」が論ぜられ、松本平へのキリスト教伝播の経緯が言及されている。その論述は「井口喜源治と研成義塾」への架橋であるために、明治十年代、すでに開始されていた松本以美教会の伝道活動、とりわけ、安曇、筑摩の「農民の世界」への厳しい伝道に関する論述を課題として残している。

第Ⅱ部では、井口と研成義塾におけるキリスト教活動の特質が論ぜられている。「和服のキリスト者」として描出されている井口の信仰は「正統的な教義」に拘束されたものではなく、また、「教会形成」と結びついたものでもなかった。井口の「霊的歩み」に共鳴し、研成義塾に学んだ人たちも所謂、牧界的配慮のなかで信仰を得た人たちではない。かれらのキリスト教活動の実体は「禁酒運動」「廃娯運動」および「教育運動」であった。かれらは、教会をもたない「無教会信者」であり、「個人の魂の救済」にとじこめることなく、むしろ、具体的に社会問題をとらえ、その問題の解決

に信仰による活力を投入した。こうした活動の背景に、安曇野の「自由民権運動」との関連をみおとしてはならない。

井口のキリスト教への関心によって展開された安曇野のキリスト教は「土着のキリスト教青年運動」であり、その実りともいえるべき「東穂高禁酒会」「研成義塾」は、この地の近代化の光源であったと本書はその点を強調している。これは日本におけるキリスト教土着の一型態として特筆すべきことであろう。

第Ⅲ部とⅣ部では、井口の精神的遺産を継いだ人びとについて論述されている。井口は自らの活動の目標を「人びとのからだの中に神の宮を形成すること」だとした。

宗教は、信仰の継承をもって存続する。それは、神の宮たる教会の形成と、絶みない牧界活動による。また「からだの中に神の宮」をもつものの「交り」によって存続する。井口の精神と研成義塾の教育の遺産は安曇野に、いまなお静かに脈動している。とすれば、井口によって展開された「無教会的」キリスト教運動と、百年の歴史をもって存続する「教会的」松本教会の歩

みとの対比は、わが国キリスト教の歴史に興味ある問題を解き明すことになろう。本書はその問題にも、重要な示唆を提示している。

佐野安仁（大学文学部助教授）

竹中正夫編
三井 久著

『近代日本の青年群像』

— 熊本バンド物語 —

（日本YMCA同盟 B6版）
（二六二頁、一五〇〇円）

本書の下地とも言えるものは、著者がタイプ印刷で自費出版された「熊本班物語」（一九七六年）である。時恰たかも熊本バンド結盟一〇〇周年の記念事業が行なわれその式典に向けて発行されたものであった。

同志社の初期の学風及びエートスの形成にあたって「熊本バンド」と呼称される一群の肥後青年たちの貢献は、はかり知れない。又それは同志社一〇〇余年の歴史の中の太い縦糸となっている。著者三井久師は

同志社の卒業生ではないのだけれども、この人ほど熊本バンドを愛し、その顕彰に情熱を傾けた人を私は他に知らない。アメリカより帰朝まもなく草場町（熊本市）教会牧師として赴任した師が、ゆくりなくも廻り合った熊本バンド奉教結盟の出来事が一人の牧師の生涯の情熱の源泉となったということに私は先ず驚いてしまう。

私も若き神学生時代、三井牧師より熊本バンドのお話を承わったことがある。ややドスのきいた渋い声で、説き来り説き去る奉教のドラマに私たちは全く酔わされた。彼らの熊本洋学校時代のエピソードとして「髀（ひ）肉のやせる思いで勉強した」というくんだりで、師は私たちを皮肉な顔で眺めわたり、「髀肉とはね、股（もも）の肉のことですよ。諸君は勉強したら股の肉がやせますか？」とからかわれたことを今思い出す。

そんな記憶も手伝ってか、一九五九年同志社の人文研の中に「熊本バンド」研究班が結成された折、私も一員として加わり、テープレコーダーをかついだりしながら熊本県下一円をかけ廻ったのであるが、その

成果はみずす書房の「熊本バンド研究」に収録されている。もとより学術書であるために実証研究が旨とされ、イマジネーションの駆使は押えられているが、これに比して三井師の著書は、以上の成果を踏まえながらも秘められたエピソードなども豊富にちりばめられていて、文句なしに面白い。その構成も見事である。この点、現代向きに配慮しつつ編集の労にあたった竹中正夫教授、又貴重な写真や資料を提供した人文研の方々の労を多としなければならぬだろう。

編者自身もすでに戦前、三井牧師の熊本バンドの講演に感銘を受けたことを「あとがき」で述懐しているが、それが当時、京大に学んでいた編者の同志社神学部入学の機縁の一つともなったとすれば、つくづく同志社とは不思議な学校だという気がしてくる。

高道 基（神戸女学院大学教授）

福井達雨著

『子どもの笑顔を消さないで』

（日本キリスト教団出版局
B6版 二七二頁、一、二〇〇円）

福井達雨さんは本学の神学部出身である。本書の、できの悪いものほどという終りに近い項に学生時代の思い出が語られている。福井さんが、できの悪い、学生であったのかどうか、それは、知る人ぞ知るのであろうが、同志社で学んだ後、重い知恵遅れの子どもたちのために全生活、全人生をともにして今日に至っている。それは三十年に近い生活の歩みであり、滋賀県の能登川町に止揚学園を創設して、すでに十八年の歳月が経っている。この間の悪戦苦闘の歩みに『僕アホやない人間だ』『生命をかつぐって重いなあ』など、十冊におよぶ著書のなかで実感的、体験的に語られている。福井さんの重い知恵遅れの子どもの立場に立った発言と行動は、いまでは全国的影响力を与えるようになった。福井さんの著書

には「精神薄弱児」という従来から考えられてきた固定観念は一切ない。この子どもたちについての医学的・心理的・社会的な理論や分析などは一切ない。ただ、福井さんが一途に求めているものはこの子どもたちの真実の姿であり、目には見えない心情であり、魂である。そして、この子どもたちの幸せについて共に考え、共に行動することにある。その実践活動のなかで、福井さんはこの子どもたちをとりまく差別の壁の厚さを実感し、怒り、嘆き、苦しんでいる。福井さんは、この怒りや嘆きや苦しみをありのままに、飾らず、照れず、自分の至らなさもふくめて記録的に事実にとって書き綴っていく。そして、自分を支えている信仰とキリスト教の教えをたえず学び、反省し、自分の行動や発言を照応しながら、希望と樂觀を明日への新しいエネルギーを湧きおこしていく。福井さんのこのたぎるような愛情と行動力が一つの大きな旋風となつて障害者（児）をとりまく差別の壁が少しづつ崩れていくように思える。しかし、社会的な差別の壁をなくすのは社会を構成する個々の人々が自から積極的に人

見えさせない自分の偏見に満ちた心を変革しなければならぬ。福井さんのこの本は人の心の変革をおこさせる力をもっている。手が温かかったという僅か数頁の文章は心をうって、涙があふれだした。福井さんは石井十次、留岡幸助、山室軍平につづく実践的なキリスト者であり、教育者であり、さらに、一步ふみでた社会事業家である。

住谷 馨 (大学文学部教授)



『同志社百年史』について

「通史編」(全二巻)

同志社百年の歴史を五つに時代区分し、次の五部から成っている。

第一部 創業と成育(明治前半期)

第二部 キリスト教教育の受難(明治後半期)

第三部 大学への道(大正期)

第四部 戦時下の学府(昭和前半期)

第五部 再生と発展(昭和後半期)

上野直蔵総長は「通史編」の「序」で、「同志社における徳育の基礎であるキリスト教は、それがキリスト教たるがゆえに、少なくとも一九四五年にいたるまで国粹的権威筋から胡乱な目でみられ、疑問視され、敵視されてきた。(中略)同志社を護るための先人たちのすさまじいまでの攻防は、まさに一つのドラマであり、読むものをして緊張と畏怖の念を起こさせるであろう。この書は同志社の犯した数々の失敗や恥辱の部分をも隠すことなく記している。」と述べておられる。ラットランドのグレイス教会における新島襄の、学校設立に関する訴えを起点とする「通史編」は、確かに、キリスト教主義をめぐる同志社の攻防を軸に展開されているといえよう。もちろん同志社の諸制度や諸学校の変遷、そこで生きた学生生徒を含む諸先輩の動向などは、それぞれ独自に、読者に訴えるものをもつはずである。

「資料編」(全二巻)

「通史編」の叙述に用いられた基礎資料およびそれに関連のあるものを中心に編纂されている。同志社開業関係にはじまり一九七五年度までの主要な資料を収録、原資料による同志社百年史といつてよく、それ自体自立性をもっている。収録資料三五〇点、従来活字になっていなかったもの、すなわち未公開資料が数多く含まれており、読者は同志社史の新しい一面を見出すであろう。研究者の期待にも応えうるものである。詳しい同志社年表を添えてある。

「通史編」約一七〇〇ページ。

掲載写真 三二五点。

頒価・六〇〇〇円

送料不要の場合 五四〇〇円

「資料編」約二〇〇〇ページ。

頒価・二二〇〇〇円送料不用の場合

一〇八〇〇円

発行・学校法人同志社
取扱い・同志社収益事業課

(電話)七五―二五一―三〇三八